

## 親鸞における本願他力思想について

山 崎 龍 明

のである。

一 親鸞の信仰の核心が、本願他力義にあることは言を俟たない。本願他力義を基底として、その信仰の三大特質とも言われる、悪人救済義（一般に悪人正機説と言われるが、周知の通り、親鸞自身にこの呼称はみられない）、往生成仏（浄土）義が成立することは、言うまでもない。

切言すれば、本願他力義によって、親鸞の信仰・思想が成立するということであり、親鸞の全信仰を一貫する重要な教説が、本願他力義にあるということを再確認しておきたいと、言うことである。曾無一善の人間（自己）、成仏不能の自己が救済されるのは、偏に、阿弥陀仏の本願救済力の然らしむるところであると言き、浄土往生の資質を具備せざる、罪業深重の自己が成仏の證果を得て、六道輪廻の迷界を超越する力用こそ、阿弥陀仏の本願他力義にあることを、親鸞は洞察した。ここに、罪惡深重、煩惱熾盛の人間救済道が開顯された。

このような、親鸞の本願他力義が、次第に形骸化し、空洞化して、本願他力義そのものの本質が見失われ、本願他力Ⅱ安易な依存主義という認識が一般に定着してしまった。当小論では、二つの問題に限定して、親鸞の本願他力義についてささやかな考察を試みたいと考える。二つの問題とは次の二点である。

①本願他力義が安易な依存主義として定着しているという事実の問題。

②本願他力義が、単純な自然思想、安直な「おかげ」思想として説かれている誤謬について

### 二

かつて、佐伯真光氏が他力本願誤用問題に対して、本願寺や信者が誤用に抗議する状況にこのように抗議した。「信仰者なら首相（鈴木善幸氏の、他力本願ではダメだという発言に對

して―筆者注〕に抗議するのがあたりまえ、というのが私の投書に対する反論の最大公約数的意見のように思われる。しかし、なぜ信仰者は抗議すべきなのか、そこを説明した人はいなかった。反論の多くは真宗信者の感情論にすぎない。眞の信仰者がとるべき態度は、おのずから別の道ではなかったかと私は思う。親鸞聖人なら、言葉じりをあげつらうようなまねはしなかった。むしろ首相発言の中心（他力本願で国の防衛は不可能である―筆者注）のほうを問題にしたはずである。それが大乗的な仏教徒の在り方であろう。首相は他力本願ではだめだ、と言った。他力本願がよい、と言ったのではない。

このように、現代の日本語では、この言葉はいつも否定的な意味に用いられる。本願寺がムキになるのもこのためではないかと思う。しかし、そうなった責任の大部分は、眞宗人と眞宗教団にある。自らの教化の怠慢をたなにあげて、日本語を常識通りに使った首相を難ずるのは本末転倒もはなはだしい。広辞苑は他力本願を（もつぱら他人の力をあてにすること）と説明している。（往生）（回向）（安心）の項にも眞宗の教義とは違った意味が載っている。西本願寺はなぜ、広辞苑その他の国語辞書に抗議しないのか」（一九八二年二月十二日、「京都新聞」）

他力本願の語の誤用に對して、果たしてそれが「信者の感情論」か「教化の怠慢」かは別として、大事な点が看過され

ているということは事実である。つまり、それが言葉だけの問題となつていくことである。誤用の背景、歴史の変遷といった点についても考慮すべき問題がある筈である。氏が指摘する通り、眞宗八〇〇年の歴史の中で、「他力本願」という語が空洞化し、言ってみればその語と、語意が市民権を得ていないという現実に目を注ぐべきであるといえよう。

かつて私は、他力本願誤用問題に対する抗議の盛況の中で次のように記したことがある。

（他力本願ではダメ）という語の用法にのみ目が向けられ、それ以上問題が拡大しないという状況は、眞宗者の教学的営為の現実を如実に語るものとして、あるいは、その貧困なありようを語るものでもあるのである。しかし、それはかならずしも今日にはじまったことではあるまい。親鸞没後、親鸞とその信仰的内実の理解をめぐる論議が積み重ねられ、伝統的な眞宗教学が構築された。が、その伝統的な眞宗教学が次第に形式化し、ときには空洞化しながらも、今日まで伝統的な眞宗教学という名のもとに、親鸞理解における有効な価値基準として存在する。その帰結が、ひとつの必然として今日の眞宗者の教学的営為の貧困さを招来するに至ったと言うこともできよう。（『眞宗教学の諸問題』佐藤三千雄教授還暦記念論文集、所収）

### 三

親鸞の著述の中に「他力本願」の語を検索すると、周知の

通り二例がみられる。

①名号をとなうというとも、他力本願を信ぜざらんは辺地にうまるべし（673頁）

②増上はよるづの善にすぐれたるなり。これすなわち他力

本願無上のゆえなり（628頁）

前者の語例では、他力本願は称名に対して、信の対象として述べられ、これが欠落した信仰は方便化土へ生まれるものであるとしている。後者は、一切の善根功德に超越したものとして述べられているところに特徴がある。

因みに「本願他力」の語例に注意してみると、①「本願他力をふかく信ぜんともがらはなにごとにかは辺地の往生に候うべき」（673頁）。②「本願他力をたのみて自力をはなれたる、これを唯信という」（621頁）。③「四論の講説さしおきて、本願他力をときたまひ、具縛の凡衆をみちびきて、涅槃のかにぞいらしめし」（504頁）④「本師道綽禪師」は、涅槃の広業さしおきて、本願他力をたのみつつ、五濁の群生すすめしむ」（507頁）。以上の四例がみられる。

概念としては、「本願他力」とは「自力を離れ」「報土往生をとぐべきもの」「凡衆を導き、涅槃に入らしむる」「五濁の群生にすすめる」ものとして説かれていることが知られる。この意味においては「他力本願」の語例となら異なることはない。このほか『歎異抄』ではあるが「悪人なお往生す、い

かにいわんや善人をや。この条一旦そのいわれあるににれども、本願他力の意旨にそむけり」（775頁）とあり、ここでは「善人よりも悪人」を救済するのが、阿弥陀仏の意旨であると述べられている。

更に親鸞の「他力」の語例と概念を探っていくと。「帰命斯行信者、攝取不捨、故名阿弥陀仏。是日他力」（33頁）。「言他力者、如来本願力也」（35頁）。「往還回向由他力」（45頁）。「憶念本願離自力心、是名横超他力也。斯即專中之專、頓中之頓、真中之真、乘中之一乘、斯乃真宗也」（43頁）。「以仏力故見彼國土、斯乃顯他力之意也」（48頁）といったものがみられるが、結局、「他力」とは「人間を攝取（救済）してやまないう仏願力、そのもの、如来の救済力」であるということが明らかにになる。ここには、如来と人間との間の緊張関係がある。どこを指しても、安易な依存主義、「單純なおかげ思想」などはみられないことだけは、確認しておく必要があると考える。であるとするなら、なぜ「他力本願」義の誤用が後世生じたものであろうか。この点について考える時、そこには真宗の歴史、教義理解に対する点検が必要になってくると考えられるのである。親鸞の「他力本願」思想が次第に人々の間に浸透していく過程で、変質をきたした。換言すれば、「他力本願」思想が人々の間に説かれる時、平易な日常性の中で、その説明がなされてきた。卑近な言葉でいえば「すべてが阿

弥陀仏のおかげ」「私たちの力は一切必要ない」「阿弥陀仏の一方的救済」といった理解が、次第に増幅され、「他人まかせ」「安易な依存主義」という概念として独り歩きしてしまつたということができないだろうか。

「門徒物忌みしらず」の語が、後年「門徒もの知らず」という語に変化し、「真宗念仏者は、仏法の学びも何も必要なし」という意味に理解され、読むことも、知ることも全く必要とせず、ただ阿弥陀仏の教えにまかせるだけである、という世界が成立してきたのである。「往生は凡夫のはからいに非ず」といった語が独り歩きして、依存主義的な信心理解が真宗念仏者の共通理解として、定着してきたといつてもよいであろう。次に、蓮如の「他力本願」の説示について着目してみたい。

#### 四

蓮如の『御文』には（帖内八十通）七例ほど「他力本願」の語がみられる。三帖目二通（451頁）、同、三通（454頁）、四帖目二通（477頁）、同、三通（478頁）、同、（480頁）五帖目三通（531頁）等々に、みられるが、特に、

阿弥陀如来の他力本願ともうすは、すでに末代いまのときのつみふかき機を本としてすくいたもうがゆえに、在家止住のわれらごときのためには相応したる他力の本願なり。あらありがたの阿弥

親鸞における本願他力思想について（山崎）

陀如来の誓願や、あらありがたの釈迦如来の金言や（454頁）

あさましというもおおろかかなり。いそぎ今日より阿弥陀如来の他力本願をたのみ、一向に無量寿仏に帰命して（477頁）

このほか、「されば弥陀如来他力本願のとうとき、ありがたさのあまり」（480頁）とか、

夫在家の尼女房たらん身は、なんのようもなく一心一向に阿弥陀仏をふかくだのみまいらせて後生たすけたまえともうさんひとをば、みなみな御たすけあるべしとおもいとて、さらにうたがいのこころゆめゆめあるべからず。これすなわち弥陀如来の御ちかいの他力本願とはもうすなり。このうえにはなお後生のたすからんことのうれしさありがたさをおもわば、ただ南無阿弥陀仏くゝとなうべきものなり（501頁）

といった用例に、蓮如らしい「他力本願」観がみられる。

このほか、「他力」の用例として「なんのようもなく、他力の信心といういわれをよくしりたらんひとは、たとえば十人は十人ながら、みなもて極楽に往生すべし」（452頁）「さればわれらがいまの他力の信心ひとつをとるによりて、極楽にやすく往生すべきことの、さらになんのうたがいのなし。あら殊勝の弥陀如来の本願や。このありがたさの弥陀の御恩をば」（517頁）「なんのようもなく他力の信心ということをはひとつ決定すれば、みなことごとく極楽に往生するなり。されば

その信心をとるといふは、いかようなるむつかしきことぞと  
いうに、なんのわづらいもなく、ただひとすじに」（453頁）、  
といった語例の中に、蓮如の「他力観」がみられる。

このような蓮如の「他力本願」「他力」の表現が、一層真  
宗者大衆の中に浸透していった。しかし、それは、蓮如の意  
志にかかわりなく、「他力本願」イコール、阿弥陀仏への絶  
対依存といった信心理解を醸成するものであったということ  
もできよう。その延長線上に、近世の説教本等々にみられる、  
阿弥陀仏への無原則な絶対依存的真宗理解があり、それが次  
第に拡大再生産され、他力本願＝他人まかせといった理解へ  
と定着していったと考えることもできるのである。

## 五

次に、他力本願の語が安易な自然主義といった概念で用い  
られることについて触れてみたい。それは、他力本願の語よ  
りも、「他力」の語の自然回帰的解釈といつてもよい。五木  
寛之の著述『他力』にそれは顕著にみられるが、今、ここで  
そのことを論ずる必要も、紙幅もないが、一言するならば、  
「他力」の語の一般的用法と、親鸞の「他力」義を混同して  
はならないということである。

かつて、戦時教学はなやかなりし頃「武勲をたてて、武勲  
をはなれる。これが親鸞の他力であり、無私を基底とする日

本精神である」と説いた真宗学者が多くいたことは、周知で  
ある。これは大河の流れに従って生きる、大いなるいのちの  
流れに身をまかせて生きることが他力の世界であると説く五  
木の所説となんら簡ぶところはない。両者に共通するのは他  
力＝自然という概念であつて、そこには「如来の誓願」が欠  
落している。「自はおのずから」「然はしからしむ」という概  
念はあつても「如来のちかいにてあるがゆえに」「法爾とい  
うは如来の御ちかいなるがゆえに」からしむるを法爾という  
といった「法爾」性が欠如しているのであつた。

知られる通り「自然法爾」章には「他力には、義なきを義  
とす」ことが示され、特に親鸞晩年の宗教的世界を示すも  
のとして、尊重されてきた。それは、多くの人が指摘するよ  
うな、親鸞晩年の宗教的境地といったような、緊張感のない  
世界ではない。如来の力強い誓願力、本願力そのものはた  
らきによつて「無上仏」に成る、究極の世界を顕示したもの  
であることは、言を俟たない。

親鸞は「憶念弥陀仏本願、自然即時入必定」（44頁）といひ  
「如来の本願の御名を信ずるひとは自然に不退のくらしいに  
たらしむる」（562頁）「本願の業因にひかれて自然に安楽にう  
まるるなり」（562頁）「信は願より生ずれば、念仏成仏自然な  
り、自然はすなわち報土なり、證大涅槃うたがわず」（510頁）  
と「自然」を示している。これらの用法に共通しているのは、

自然Ⅱ救済の必然性Ⅱ本願の道理という図式であり、大地自然の回帰性等を示すものではない。「自然法爾」章に六回も「如来のちかい」という語がみられるが、ここにも、親鸞の人間救済の必然性が、如来の誓願そのものにあるという視点がみられる。親鸞にとつて、人間救済とは如来の本願力の必然的帰結であり、それは、如来にとつて、自然（本願）の法則なのでもあった。

かならずともめざるに無上の功德をえしめ、しらざるに広大の利益をうるなり、自然にさまさまのさとりをすなわちひらく法則なり。法則というは、はじめて行者のはからいにあらず、もとより不可思議の利益にあづかること、自然のありさまともうすことをしらしむるを法則とはいふなり、一念信心をうるひとのありさまの自然なることをあらわすを法則ともうすなり（61頁）

ここには、念仏の法が「無上の功德」と「広大の利益」を獲得の道であり、従つて、「さまさまのさとり」をひらく「法則」であることがここに説示されている。その法則は「行者のはからい」ではなく、如来のはからい、はたらき（力用）であるから、「不可思議の利益」をこの身に享け、「一念信心をうる」ことができるのであると説いている。徹底した親鸞の「他力」「本願力」観がここに示されている。ここには、「他力本願」Ⅱ依存主義といった余地など全くない、信心の

世界がある。すると、この語の誤用は、われわれ真宗者自身の信心理解にかかわっているということができよう。そのことを再確認する信仰の営為が、今求められている。

《記》引用の頁数は、『真宗聖教全書』Ⅱ、Ⅲである。

〈キーワード〉 本願他力 親鸞 蓮如 五木寛之

（武蔵野女子大学教授）

## 新刊紹介

谷 貞志 著

### 刹那滅の研究

A5判・七八〇頁・定価二八、〇〇〇円  
春秋社・二〇〇〇年二月